The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Cultural Formation Studies (5) はじめに
Author(s)	木村, 茂雄; 小杉, 世
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 1-4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91533
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はじめに

１．*Cultural Formation Studies* Ⅴの刊行に際して

この報告書は、大阪大学大学院言語文化研究科が主催する「言語文化共同研究プロジェクト」のひとつとして 2022 年度に進めた共同研究 Cultural Formation Studies (CFS) の報告書である。CFS は、大阪大学大学院人文学研究科（旧言語文化研究科・旧文学研究科）教員と大学院生、名古屋外国語大学教員、バングラデシュのイスラム大学人文社会科学学部教員などを「正規」メンバーとする研究会だが、そこには旧言語文化研究科を修了して大学の教職についているものなど、「非正規」のメンバーも数多く参加している。そして、東京、名古屋、金沢、岐阜などから集まってくるこれらのメンバーを抜きにして、この研究会は成り立たない。これらの OG / OB が現役の院生たちに与えるアドバイスや刺激も、たいへん有意義なことと感じている。

研究会のこのようなメンバー構成には過去の経緯もある。Cultural Formation Studies (CFS) は、26 年前にはじめた研究会の「後継」の「後継」にあたるからだ。その最初の研究会は、1996 年の春に開始したカルチュラル・スタディーズの研究会「カルチュラル・スタディーズ・サークル (CSC)」である。「言語文化共同研究プロジェクト」の制度がスタートしたのは 2000 年度なので、その 4 年前のことになる。その後、2005 年度から 2017 年度までは「ポストコロニアル・フォーメーションズ (PCF)」と研究会の名称を変え、どちらかといえばポストコロニアル研究に焦点を絞った研究を進めてきた。

研究会の名称をこのように変えてきたのは、ひとつには、その時々のメンバーの関心を反映させたためである。この数年は、とくにアメリカ文学・アメリカ文化を専門とする教員や院生のメンバーが増えてきたようだ。しかし、1996 年当時から現在にいたるまで、研究会の名称は変わっても、また、そのメンバーに多少の入れ替えはあっても、文化や文学の研究に対する私たちの基本的な姿勢や視点には、ある連続性が保たれてきたように思われる。簡単にいえば、ひとつには、文化や文学を社会に開かれたものとみなし、その相互関係や相互作用を（必要に応じて「学際的」に）捉えようとする姿勢、そのこととも関連して、もうひとつは、それらの文化や文学が形成されるプロセス（フォーメーション）を注視しようとする姿勢である。

そして、このような姿勢は、私たちがカルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究から学んできた姿勢にほかならない。2018 年度から研究会の名称を Cultural Formation Studies (CFS) と改めたのは、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究の基本

姿勢から学びつつも、特定の狭い「分野」に特化した研究会という印象を避け、その門戸を、より幅広く多様な領域に開いていきたいという意図が込められている。

２．2022 年度の CFS の活動

CFS の研究会は従来、原則として毎月の最終土曜日に開催してきたが、2020 年度以降は新型コロナの影響により、Zoom で開催してきた。2021 年度は都合により開催回数は少なくなったが、1 回にまとまった量を読むことになった。本研究会では、たいていは文化や文学にかかわる英語文献を取り上げ、それぞれの担当者がその内容を紹介し検討した後、全体討論に入る。このようにして、先行研究の趣旨や意義、欠点や盲点などを議論していく。それはまた、私たち自身の批評意識や批評の言葉を鍛えていくプロセスでもある。

2021 年度の最初の研究会は、昨年度からの継続で、グローバリゼーション論の入門書である Jan Nederveen Pieterse の *Globalization and Culture: Global Mélange* (Fourth Edition) を読了し、3 月には新しい批評書 *Anthropos and the Material* (2019) に取り組み始めた。

以下に、研究会の記録を残しておきたい。開催日、章およびページ数、担当者の順に示す。研究科の修了生で大学の専任職についているものには、現職の大学名も付記しておく。

1. 2022 年 9 月 10 日
   Jan Nederveen Pieterse
   Globalization and Culture: Global Mélange (Fourth Edition). Rowman & Littlefield, 2019.
   pp. 143-161 Chapter7 “Globalization is Braided” 加瀬佳代子
   pp. 163-185 Chapter 8 “Hybrid China” 小杉世
   pp. 187-205 Chapter 9, 10 “Populism, Globalization and Culture”“Global Melange” 森野豊
2. 2023 年 3 月 11 日
   Penny Harvey, Christian Krohn-Hansen, and Knut G. Nustad, eds.
   Anthropos and the Material. Duke University Press, 2019.
   pp. 1-31 Introduction 石倉綾乃
   pp. 35-58 Chapter 1 木村茂雄

３．本研究会の来し方、行く末（木村）

前にも述べたように、本研究会は 1996 年に開始された「カルチュラル・スタディーズ・サークル (CSC)」を出発点としている。いまの院生の会員の多くが生まれる前のことだ。ちなみにその当時は、1950 年台のイギリスでレイモンド・ウィリアムズなどにより創始されたカルチュラル・スタディーズが、アメリカやオーストラリア、そして日本にも飛び火して、大きなブームを巻き起こしていた。CSC で最初に取り上げたのも、アメリカで開催された国際学会をもとに編集された *Cultural Studies* (Routledge, 1992) という論集だった。

40 編の論考を収めた 700 ページを超えるこの本を完読したあと、1958 年出版のレイモンド・ウィリアムズの出世作 *Culture and Society* に向かっていったことを覚えている。

これは「流行に乗った」といえなくもないだろう。じっさい、学外の聴衆も呼び込んだ「オープン CSC」なるシンポジウムを 2 回ほど企画し、かなりの活況を呈したことなども懐かしい。一方、この時期は、言語文化研究科が発足してから数年後のことで、この新しい研究科の教育研究の方向性を模索していた時期でもあった。いわゆる「伝統的」な文学研究をどのように捉え直していくかという問題意識を、研究科の若手教員が共有していたことも CSC 発足の背景にあったのだ。

私事になるが、新しい文学研究という面でそのころ私が取り組みはじめていたのがポストコロニアル文学だった。この分野の古典的なガイドブック *Empire Writes Back* (Routledge, 1989) を『ポストコロニアルの文学』（木村茂雄訳、青土社）として翻訳刊行したのが 1998 年であり、2004 年には、CSC のメンバーをおもな執筆者とする『ポストコロニアル文学の現在』（木村茂雄編、晃洋書房）を刊行した。2005 年度からは、研究会の名称も「ポストコロニアル・フォーメーションズ」と改めて活動をつづけた。その成果のひとつが、2010 年に刊行された『英語文学の越境―ポストコロニアル／カルチュラル・スタディーズの視点から―』（木村茂雄・山田雄三編著、英宝社）である。同書には、CSC と「ポストコロニアル・フォーメーションズ」の研究報告書を初出とする 10 編の論考が収められている。その執筆者の顔触れは、旧言語文化研究科の教員が 4 名、その院生と元院生が 6 名だった。

この本の出版から 13 年後の現在、研究会は Cultural Formation Studies (CFS) と改称され、新しいメンバーも次々と迎えてきた。現在は『英語文学の越境』の続編にあたる書物を編纂しようという話も持ち上がっている。『現代文化の冒険』という仮のタイトルで、CSC から現在にいたる研究会のメンバーを中心に執筆者を募っているところである。

レイモンド・ウィリアムズの代表的なエッセイのひとつである “Culture is Ordinary” が発表されたのは、*Culture and Society* と同年の 1958 年のことだった。この比較的短いエッセイのなかで、彼は “Culture is ordinary” というフレーズを 7 回も繰り返している。またウィリアムズは、“Learning is ordinary”、“Education is ordinary” とも主張する。そして、“ordinary people” や “ordinary experience” の只中に「文化」を位置づけ直そうとする。この “ordinary” という言葉のニュアンスはなかなか難しいが、ウィリアムズがいいたいのは、ひとつには、文化とはケンブリッジ大学の教員や学生などのエリートのものではなく、彼の故郷に住む労働者など「普通の」人びとのものだということである。また、文化とは特別なものではなく「日常的な」ものだという意味もそこには込められている。ただし、ウィリアムズのいう「日常的な文化」は「ルーティーン」ではない。重要なのは、それがつねに広げられたり成長したりするものだという点であり、“expansion” や “growth” という言葉も、彼はこのエッセイのキーワードとして繰り返し用いている。還暦をだいぶ過ぎてから大学や住居を移し、新しい日常を迎えた私も、どのようにしたら自分を広げたり成長させたりすることができるのか、自問することの多い日々である。

４．2022 年度をふりかえって（小杉）

ここ数年オンラインにより研究会を継続してきたが、3 月には会場参加と Zoom を併用してハイブリッド開催が可能になった。2000 年度に言語文化研究科で始まった言語文化共同研究プロジェクトは 20 年を超えて継続されたが、今回は電子版のみでの発行の最初の年となる。また 2022 年 4 月から言語文化研究科と文学研究科が新しく統合して人文学研究科となり、新しいメンバーも迎えてスタートすることができたのは喜ばしい。

この共同研究プロジェクトは、さまざまな関わり方のメンバーの貢献に支えられている。今年度も Zoom でのオンライン開催の研究会に継続して参加し活発な議論を支えてくださった教員、修了生、院生の皆さまに感謝する。ようやく新型コロナ状況の規制が解かれ、対面の研究教育活動を取り戻しつつある昨今、Zoom 併用で遠方の参加者の便宜をはかりながら、再び対面で議論を行える機会を今年度は持てそうなこと、楽しみにしている。最後に RA として研究会の開催や編集作業を手伝ってくれた王立珺さんにもお礼を申し上げたい。

木 村　茂 雄
小 杉　世